

久留米大学

比較文化研究所年報

第6号

2012

比較文化研究所年報 第6号 (2012年度)

目 次

はじめに	1
比較文化研究所の概要	2
活動報告	
1. 研究部会報告	
(1) 欧州研究部会	5
(2) 外国語教育研究部会	8
(3) 健康文化研究部会	9
(4) 地域博物館研究部会	11
(5) 福祉コミュニティ研究部会	13
(6) 文化財保存科学研究部会	15
(7) 民事法研究部会	18
(8) 地域社会・文化・経済研究部会	18
(9) 地域精神保健福祉研究部会	20
(10) 心理教育研究部会	21
(11) 会計専門職研究部会	24
2. 筑後川流域圏の総合研究	27
3. 研究員発表会	28
4. 日誌（運営会議、研究所会議等）	30
施設・設備	31



は じ め に

比較文化研究所長 大矢野 栄次

久留米大学比較文化研究所年報第 6 号の発刊にあたり、今後の本年報の挨拶あり方についてご説明をします。本年報は毎年の年度明けに、1 年前の本研究所の活動内容について報告していましたが、これまで、本研究所の報告書が 1 年遅れであることを改善するために、本年は春の第 5 号（平成 23 年度）に続いて、2 回目の第 6 号（平成 24 年度分）の報告書となります。この経過措置を踏まえて、来年度からは、毎年 5 月頃に前年度の報告書が発刊されるようにする予定です。

本研究所の設立目的は、久留米大学における文系大学院「久留米大学比較文化研究科」を設置するための母体として、同大学院の研究機能を受け持つことにありました。このような目的のために当初は、研究員の所員も比較文化研究科後期博士課程教員に限られていました。しかし、「久留米大学大学院比較文化研究科」から派生して「心理学研究科」や「ビジネス研究科」が設立され、大学院のスタッフの増加とともに研究体制が充実していく中で、本比較文化研究所の役割も次第に変化することが必要となってきました。これからも、学内の 3 つの大学院との連携を深めながら本来の学際的な研究を進めていくことが重要であると期待されています。

本研究所の研究を通して、研究員のそれぞれの学問分野における研究の進展とともに、各研究員教育力が充実することが期待されています。特に、筑後川流域、あるいは有明海周辺域に立地する久留米大学が、地域に貢献する大学として発展していくためには、研究機能の充実とその成果の公表の場が充実することが期待されています。このような課題が「比較文化研究所」に求められていると考えています。そのためには、地域の独特の文化や社会を研究スタッフが自由に研究し、豊かな自然と歴史を背景としたこの大筑紫平野において、ユニークな研究がこれからも進められて行くことを期待しています。

各研究員の研究の努力と成果が久留米大学とこの地域の発展に貢献することを期待します。

2013 年 9 月

比較文化研究所の概要

比較文化研究所は、1987年に久留米大学付属の研究所として創設されました。

研究所の目的は、「新しい学際的統合を基本理念として、文化の構造と機能に焦点を当てた総合的比較文化研究を行うこと」（比較文化研究所規程）であり、学問領域を超えて学際的な研究の推進を図ることを目指すものです。

設立当初は、文系学際大学院「比較文化研究科」を設置するための母体として、大学直属の研究所として設置されました。大学院比較文化研究科の研究機能を受け持つという性格上、専任所員及び大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のみによって組織されており、研究所長もまた、比較文化研究科委員長（当時、現在の比較文化研究科長にあたる）が兼任しておりました。

その後2001年において、研究所の組織が改正され、比較文化研究所に、大学での研究成果を地域や社会へ還元するという役割が加わりました。それに伴って、組織も変更され、比較文化研究所所員も、大学院担当教員を中心に、その他の希望する専任教員にまでその枠が広がられました。

まず、2006年度より、研究成果の地元地域への還元を意図して地元である筑後川流域圏を対象地域とした研究を行うというプロジェクト研究「筑後川流域圏の総合研究（大川研究）」を開始しました。2006年度～2007年度においては、大川地域における研究が行われ、2008年にその第1回の研究報告書「大川地域研究」を発刊しました。また同時に、大川市における報告会も開催いたしました。2008年度～2009年度においては、研究対象地域を旧三潴郡に移して、「筑後川流域圏の総合研究（三潴研究）」さらに研究を進め、2010年に第2回の研究報告書「三潴地域研究」を発行いたしました。そしてさらに、2010年度～2011年度においては、研究対象地域を旧久留米市に移して、「筑後川流域圏の総合研究（久留米研究）」の研究を進め、2011年度には研究報告書「久留米地域研究」を発行いたしました。

2012年度からは、研究対象地域をうきは、朝倉地区に移して研究を進めております。

いずれの研究事業も、比較文化研究所の研究成果の地域への還元、さらには、久留米大学と地域との連携強化を図るものであります。平成24年度においては、次のような組織・体制となっております。

組織体制

所 長	大矢野 栄次（経済学部教授と兼任）
専任所員	大西 良（講師）
客員教授	鈴木 廣 森 醇一郎 保坂 恵美子
所 員	86名（専任所員1名含む）、 大学院比較文化研究科後期博士課程の教員31名、 大学院心理学研究科後期博士課程の教員8名、

任意に加入する助教以上の教員46名

特別研究員 3名

研究部会研究協力者 8名(文化財保存科学研究部会 8名)

研究員 21名

専任所員は、講師以上の教員となり、任期制をとっております。

所員は、専任所員、大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のほか、大学院心理学研究科後期博士課程の教員および任意に加入する助教以上の教員により構成されています。

研究体制としては、「研究部会」を置き、各研究部会長が研究活動の中心として研究活動をリードしています。2012年度における研究部会は以下の通りです。また、各研究部会の研究活動を次項以下に示します。

- 1) 欧州研究部会 (部会長 児玉昌己教授)
- 2) 健康文化研究部会 (部会長 満園良一教授)
- 3) 外国語教育研究部会 (部会長 李 偉准教授)
- 4) 福祉コミュニティ研究部会 (部会長 瀧崎裕子教授)
- 5) 民事法研究部会 (部会長 石川真人教授)
- 6) 文化財保存科学研究部会 (部会長 狩野啓子教授)
- 7) 地域博物館研究部会 (部会長 吉田洋一准教授)
- 8) 地域社会・文化・経済研究部会 (部会長 大矢野栄次教授)
- 9) 地域精神保健福祉研究部会 (部会長 辻丸秀策教授)
- 10) 心理教育研究部会 (部会長 園田直子教授)
- 11) 会計専門職研究部会 (部会長 杉野博貴教授)

研究員は、後期博士課程を修了した者が、その後も研究を続け、博士の学位論文の作成を目指すという者等が含まれます。2012年度は、21名の研究員が在籍しており、指導教員の指導の下、各自の専門分野の研究を行っています。

議 決

比較文化研究所における議決組織として、主として次の2つの議決組織があります。

運営会議：所長、専任所員、研究部会長、所員の代表からなる組織で、2012年度は合わせて14名の運営委員で構成されています。研究所の運営に関する中心的な議決機関となります。

研究所会議：所長、専任所員、所員全員からなる組織で、規程、運営方針、予算、人事等に関する決定を行います。

また、学部などとの必要な連絡調整を図り、研究所の円滑な運営を期するため、研究所協議会が置かれています。協議会は、所長、学部長、比較文化研究科長、心理学研究科長、ビジネス研究科長、法科大学院長、専任所員の教授を含む所員の教授5名によって組織されています。

おもな活動

比較文化研究所の活動は、研究部会の活動および研究所の活動に分かれます。

本年度の活動については次項以下を参照ください。

研究成果の公表

『比較文化研究』

研究所の紀要として『比較文化研究所紀要』第 1 輯を1987年に発行しましたが、その後1993年発行の第14輯からは『比較文化研究』と紀要名を改称しています。また、平成21年度より、査読制をとり、また、年 1 回の発行となっております。第47輯の目次は以下の通りです。

『比較文化研究』第47輯(2013年 3 月発行)

- 研究ノート 大矢野栄次「水郷日田市民の水量増加運動 ―自然資源再獲得作戦―」 pp.1-14
大西 良「キャンパスを開放したイベント型まちづくりの実践的研究 ―“ゆにばひろば”参加者のコミュニティ意識に関する調査結果を中心に―」 pp.15-25

各研究部会等の研究成果の公表

また、各研究部会などにおいても出版物をはじめとする研究成果の発表が行われておりますが、これらの成果については、各研究部会等の報告(後述)をご参照ください。

さらに、研究員については、平成18年度から、年度末の 2 月に、研究員研究発表会を行い、その年度における研究成果の発表が行われています。

『比較文化研究所年報』の刊行(本冊)

比較文化研究所における 1 年間の研究成果の報告および比較文化研究所の学外への周知を目的に、2008年度(2007年度の報告)より刊行を開始しました。

筑後川流域圏の総合研究(うきは・朝倉地域研究)

久留米大学は、筑後川流域圏の中央部に位置しますが、久留米大学の位置する筑後川流域圏を研究し、さらにその成果を地域に還元しようとするものです。本研究は2006年度より開始しています。現下のところ、下流域から上流域へ 2 年単位で研究を進めており、2006～2007年度においては、筑後川河口付近の大川市を中心とした地域を対象とし、2007年度末に『大川地域研究』を刊行しました。2008～2009年度は、研究対象地域を、筑後川を少しさかのぼった旧三潞郡(久留米市三潞町、久留米市城島町、三潞郡大木町)を中心とした地域を対象に、研究を進め、2009年度末に、その成果をとりまとめ、報告書『三潞地域研究』を刊行しました。そして、2010年度～2011年度は、久留米市を対象地域として、研究を進め、2011年度末に『久留米地域研究』を刊行しました。2012年度からは、さらに筑後川をさかのぼったうきは・朝倉地域を対象に研究を進めております(詳細は別項参照)。

活動報告

1. 研究部会報告

(1) 欧州研究部会

欧州部会としては、学外講演活動を中心に、広く福岡や近隣市民を対象として、広報、学習活動を実施している。

2012年度比較文化研究所欧州部会公開講座を7回予定して、無事全回開催できた。

特にそれまでのアクロス福岡からエルガーラオフィスに会場を移して、大学の公開講座と連動する形で、開催している。参加者とともに、広範にわが国の欧州の専門家を招き、知見を深め、合わせて久留米大学の比較文化研究所の広報活動の一環をになって活動している。

以下に講演会の日時・会場・演題・講演者の略歴も併せて記載した。

第1回

日 時：平成24年12月7日(金) 15時00分～16時30分 (含む質疑応答)

会 場：久留米大学福岡サテライト教室 (中央区天神1-4-2 エルガーラホール6階)

演 題：「EU の共通農業政策の軌跡」

講 師：平岡 祥孝 (ひらおか よしゆき) 札幌大谷大学社会学部教授

略 歴：大阪市生まれ。

1983年北海道大学農学部農業経済学科卒業。

1985年北海道大学大学院農学研究科修士課程修了 (農業経済学専攻)。

九州大学博士 (農学)。

静修短期大学 (現札幌国際大学短期大学部)、北海道武蔵女子短期大学勤務を経て、2009年札幌大谷大学短期大学部教授、新学部設置準備室長。2012年現在。

主 著：『英国ミルク・マーケティング・ボード研究』(大明堂)、『北海道再建の戦略』(共編著、北海道新聞社) 他。訳書『イギリスのミルク・マーケティング制度』(農林統計協会)、『EC 酪農業の価格と所得』(農政調査委員会)、『EC 酪農業における生乳クォータ制度』(農政調査委員会) 他。2001年日本消費経済学会賞受賞。

第2回

日 時：平成24年12月14日(金) 15時00分～16時30分 (含む質疑応答)

会 場：久留米大学福岡サテライト教室 (中央区天神1-4-2 エルガーラホール6階)

演 題：「EU はどのようにして農業を守ってきたか」

講 師：豊 嘉哲 (ゆたか よしあき) 山口大学経済学部准教授

略 歴：1973年生まれ。

1996年京都大学経済学部卒業、1998年京都大学大学院経済学研究科修士課程修了（経済学修士）、2003年京都大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学、2006年京都大学大学院経済学研究科博士号（経済学）取得。山口大学経済学部専任講師、同助教授を経て、2007年より現職。

主 著：『EU 共通農業政策と結束—ウルグアイ・ラウンド以降の共通農業政策—』（山口大学経済学会、2006）、「共通農業政策の非共通部分の拡大」（日本 EU 学会編）、『日本 EU 学会年報』（2012）ほか。

第 3 回

日 時：平成24年12月21日（金）15時00分～16時30分（含む質疑応答）

会 場：久留米大学福岡サテライト教室（中央区天神1-4-2 エルガーラホール 6 階）

演 題：「ポピュリズムに向かうヨーロッパ？—マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム」

講 師：畑山 敏夫（はたやま としお）佐賀大学教授

略 歴：1953年生まれ。

1976年大阪市立大学法学部卒業、1985年大阪市立法学研究科博士課程単位取得退学（2008年法学博士）、1985年佐賀大学教養学部講師、同学部助教授・教授を経て1997年佐賀大学経済学部教授。

主 著：『フランス緑の党とニュー・ポリティクス』（吉田書店、2012年）、『現代フランスの新しい右翼』（法律文化社、2007）、編著：『実践の政治学』（法律文化社、2011）、『現代政治のパースペクティブ』（法律文化社、2004）ほか多数。

第 4 回

日 時：平成25年 1 月25日（金）15時00分～16時30分（含む質疑応答）

会 場：久留米大学福岡サテライト教室（中央区天神1-4-2 エルガーラホール 6 階）

演 題：「オバマ再選とヨーロッパ」

講 師：島村 力（しまむら つとむ）拓殖大学海外事情研究所客員教授

略 歴：1933年東京都浅草区生、1957年東京大学教養学部教養学科を卒業、中央公論社に入社、『中央公論』編集長を経て、拓殖大学海外事情研究所教授、2003年より拓殖大学海外事情研究所客員教授

主 著：『Have a Good Time』（タイムライフ社、1978）、『英語で日本国憲法を読む』（グラフ社、2001）、『アメリカ人も知らないアメリカの恥部』（kk ベストセラーズ、2003）その他、「米共和・民主全国党大会の攻防」（『海外事情』拓殖大学海外事情研究所、2012年10月号）ほか多数

第 5 回

日 時：平成25年 2 月22日（金）15時00分～16時30分

会 場：久留米大学福岡サテライト教室（中央区天神1-4-2 エルガーラホール 6 階）

演 題：「米国の NATO 政策」

講 師：渡部 恒雄（わたなべ つねお）東京財団上席研究員・政策研究部ディレクター

略 歴：1963年生まれ。東北大学歯学部卒、米ニュースクール・フォー・ソーシャルリサーチ政治学修士課程修了。CSIS（戦略国際問題研究所）で客員研究員、研究員、主任研究員、上級研究員。2005年に帰国、三井物産戦略研究所主任研究員を経て、2009年から東京財団ディレクター（政策研究・外交安保担当）兼上席研究員。CSIS 非常勤研究員と沖縄平和協力センター上席研究員を兼任。

主 著：『冷戦後の NATO』（共著、ミネルヴァ書房、2012年）、『二〇二五年米中逆転』（PHP 研究所、2011年）、『米軍再編と日米安全保障協力：同盟摩擦の中で変化する沖縄の役割』（共著、福村出版、2008年）他。

第 6 回

日 時：平成25年 3 月 8 日（金）15時00分～16時30分

会 場：久留米大学福岡サテライト教室（中央区天神1-4-2 エルガーラホール 6 階）

演 題：「岩倉遣欧使節団と新島襄」

講 師：大越 哲仁（おおこし てつじ）同志社大学同志社社史資料センター第一部門研究（新島研究）
会員

略 歴：1961年福島県生まれ。歴史家（国際史研究、新島襄・徳富蘇峰研究）、マーケティング研究者。公益財団法人蘇峰会理事、社団法人日本ペンクラブ会員、同電子文藝館委員会委員。同志社大学法学部卒業、放送大学大学院文化科学研究科修了、修士（学術）。
「新島研究論文賞」、「蘇峰蘆花論文賞」受賞。

著 書：『欧米から見た岩倉使節団』（共著、ミネルヴァ書房）

『欲望分析理論による実践的エコ・マーケティング論』（単著、明治大学リバティアカデミーブックレット 11）等、論文多数。

第 7 回

日 時：平成25年 3 月 29 日（金）15時00分～16時30分

会 場：久留米大学福岡サテライト教室（中央区天神1-4-2 エルガーラホール 6 階）

演 題：「日本著作権法は西欧法をいかに摂取したか」

講 師：大家 重夫（本学名誉教授）

略 歴：1934年生 小倉高校、京都大学法学部を経て、文部省入省、文化庁宗務課長等を歴任。1998年久留米大学教授就任、法学部長等、法学部特任教授を経て、現在、久留米大学名誉教授。
公益社団法人国際日本語普及協会理事、特定非営利活動法人日本肖像権協会理事

主 著：「タイプフェイスの法的保護と著作権」成文堂、2000年。「改訂版 ニッポン著作権物語」青山社、1999年。「著作権を確立した人々 2 版」成文堂、2003年。「唱歌『コヒノボリ』『チューリップ』と著作権」全音楽譜出版社、2004年。ほか多数。

（文責 児玉 昌己）

(2) 外国語教育研究部会

外国語教育研究部会は、外国語教育のバックグラウンドの人間教育をモットに、毎年外国語語学、文学と教育のみならず、その周辺分野の異文化コミュニケーション、異文化理解、人間関係など幅広い課題を取り上げ、専門的な研究者を講師に、教員及び地域住民を対象にした講演会を実施している。

2012 年度は、久留米大学外国語教育研究所と共催し、これからの大学共通外国語教育に関する講演会を実施した。講師として獨協大学経済学部経済学科 岡田圭子教授にお願いした。参加者は本学教員、非常勤講師及び他大学教員計 8 名であった。

演 題：これからの大学共通外国語教育—獨協大学の共通英語教育を例として

日 時：平成25年 2 月23日 土曜日 17:00~18:30

場 所：久留米大学福岡サテライト（エルガーラオフィス 6F 601-602）

講演者：岡田圭子（獨協大学経済学部経済学科 教授）

講師略歴

1958年北海道生まれ。カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）応用言語学部博士課程単位取得。高等学校英語教員（札幌市）、北海道東海大学（札幌市）を経て、2003年より獨協大学（埼玉県草加市）で全学共通カリキュラムの英語科目をコーディネートしている。

研究テーマ

英語教育（再導入教育、英語プログラム運営、カリキュラム開発、教材開発など）

第二言語習得

著書（共著）

『アスリートたちの英語トレーニング術』（岩波ジュニア新書、2011）

英語教科書（共著）

『躍進する企業—時代を見抜くビジネスの先鋒』（松柏社、2009）

『リーディングから始める英語プレゼンテーション入門』（アルク、2010）ほか。

講演内容

獨協大学は埼玉県草加市にあり、4 学部10学科を持つ私立大学である。本学が使命として掲げる「21世紀の社会に貢献する国際人の育成」に必要な教養教育を担う「全学共通カリキュラム」は、2003年にスタートした。英語を専攻としない3 学部7 学科の学生を対象とする「外国語科目群英語部門」（以下全カリ英語と称する）は、本学の教育理念実現に貢献する共通英語教育の開発に取り組んでいる。

2008年に出された中央教育審議会の「学士課程教育の構築に向けて（答申）」は、大学の共通英語教育のあり方をあらためて考えさせる重要な提言だった。たとえば、「教育目標を具体的に掲げ、何ができるようになるべきかを具体的に示し、最低限の共通性を重視する。また、FD（Faculty Development）を通して教育力の向上を図り、教育の質保証を行う。」などの提言は、共通英語教育の計画・実施において基本となるものだと言えよう。

全カリ英語では、共通科目の目標設定、共通課題および試験の制作と実施、e-learning の導入、教員ハンドブック作成、教員と学生へのニュースレター配布、非常勤教員を対象とする FD ミーティングなどを早くから進めていたが、さらなる環境整備の充実を図っていくことを目指して、文部科学省支援事業に応募し、平成21年度文部科学省「大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム」に採択された。平成24年 3 月に支援期間を終了したこの GP の取り組みについて、その概要を報告し、共通外国語教育の一つのあり方として紹介された。

(文責 李 偉)

(3) 健康文化研究部会

《活動報告》「医療文化史からみた筑後地域における医学史の比較研究」

平成24年度の健康文化部会は、従来の大学付置の博物館、資料館などを中心に様々な資料収集と視察に加え、「筑後の医療文化と大学博物館」のテーマで講演会を開催した。その講演会は 2 演題であり、昨年度の研究会を踏まえた「大学博物館の現状と将来」と、「筑後地域における医療の歴史と久留米大学」になる。なお、資料収集と視察は他の出張時に訪問したものも含まれる。

1. 4 月 6 日(金)：日本はきもの博物館—日本郷土玩具博物館
2. 4 月 8 日(日)：京都大学総合博物館
3. 4 月 21 日(土)：大妻女子大学博物館—日本カメラ博物館
4. 4 月 29 日(日)：熊本大学五校記念館
5. 5 月 6 日(日)：村上医家資料館—大江医家資料館
6. 6 月 9 日(土)：香川大学博物館
7. 6 月 10 日(日)：津山洋学資料館
8. 6 月 16 日(土)：龍谷大学龍谷ミュージアム—花園大学歴史博物館—大谷大学博物館
9. 6 月 17 日(日)：仏教大学宗教文化ミュージアム
10. 6 月 23 日(土)：江戸東京博物館
11. 6 月 24 日(日)：たばこと塩の博物館
12. 7 月 7 日(土)：京都嵯峨芸術大学附属博物館
13. 8 月 6 日(月)：杉野学園服飾博物館
14. 9 月 2 日(日)：東京農業大学「食と農」の博物館—特撮博物館(東京都現代美術館)
15. 9 月 3 日(月)：昭和女子大学光葉博物館
16. 9 月 15 日(土)：産業技術記念館
17. 9 月 16 日(日)：トヨタ博物館
18. 9 月 17 日(月)：別府大学大分香りの博物館
19. 9 月 19 日(水)：東京大学医学部・医学部附属病院「健康と医学の博物館」
20. 1 月 24 日(木)：鹿児島大学総合研究博物館収納庫
21. 2 月 13 日(水)：大阪商業大学商業史博物館—アミューズメント産業研究所

22. 2月14日(木):大阪医科大学歴史資料館

第3回 比較文化研究所 医療文化講演会

開催日時:平成24年12月15日(土) 13時~17時00分

場 所:久留米大学御井図書館 AV ホール

演 題:「筑後地域における医療の歴史と久留米大学」

演 者:薬師寺 道明(久留米大学名誉学長)

演 題:「大学博物館の現状と将来」

演 者:鹿児島大学総合研究博物館前館長 大木公彦 名誉教授

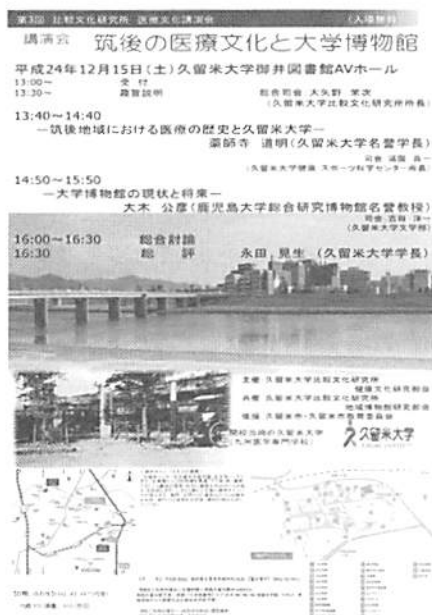
両講演会に先立ち、本研究所の大矢野所長が挨拶を兼ねて講演会開催の趣旨を説明した。その内容は、本学、つまり医学部の歴史に触れつつ、古代からの豊富な歴史下にある久留米の面白さを交え久留米大学における大学博物館の方向性(あるいは可能性)について語ったものである。

薬師寺先生の講演は、筑後地区における江戸時代からの医療の歴史を筑後川と言う地理的に恵まれた文化誌も散りばめ、その延長上に本学発祥の歴史から今に綴るものであった。特に、本学発祥期における逸話は興味深く、語り継がれるべきものと思う。

また、大学博物館については、大木先生が関わった設立前後から現在に至る過程を諸外国との比較、国内の大学博物館における歴史とともに話を進められた。その中で、大学博物館が地域において果たす役割は大きく、大学からの情報発信は行政との相互理解も不可欠であることを強調していたことは印象深い。後援でありながら、久留米市関係者が皆無であったことは残念である。

最後に、永田学長から総評を頂いたが、大学における歴史の共有化と大学博物館が図書館とともに大学に義務付けられたものであることで認識した旨、今後の取り組みを期待させるものになった。

(文責 満園 良一)

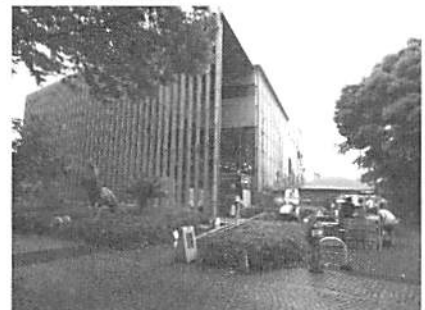


講演会チラシ



龍谷ミュージアム

東京農業大学博物館



(4) 地域博物館研究部会

運営（研究）テーマ

地域博物館研究部会は、筑後川水系を中心に形成された地理的環境のもと、筑後川流域の将来計画を策定するうえでの大学組織の役割として、周辺自治体や市民と共に協力・連携し、歴史的環境を保持し地域文化を継承していくことを目的とする。

運営（研究）計画

- ①九州管内を中心とした地域博物館の現地調査・視察
- ②筑後川水域関連資料の保存・収集（学生への還元）
- ③久留米大学関連資料の保存・収集（学生への還元）

2012年度の活動報告

①バス巡見（平成24年11月16日）

「城館跡・環濠集落を巡る」企画・主催：佐賀大学低平地研究会歴史専門部会

共催：久留米大学比較文化研究所 地域博物館研究部会

行程：12：20 久留米大学発 →（バス移動）→ 13：10 JR 神埼駅集合（現地集合可）→（バス移動）→ 姉川城跡（現地解説 30分程度）→（徒歩移動、芦辺の館集合）→ 横武城跡 →（バス移動）→ 直島城跡 →（バス移動）→ JR 神埼駅解散 → 久留米大学

②比較文化研究所 第3回 医療文化講演会（平成24年12月15日）

「筑後の医療文化と大学博物館」（健康文化研究部会・地域博物館研究部会共催）

詳細は健康文化部会の活動報告参照

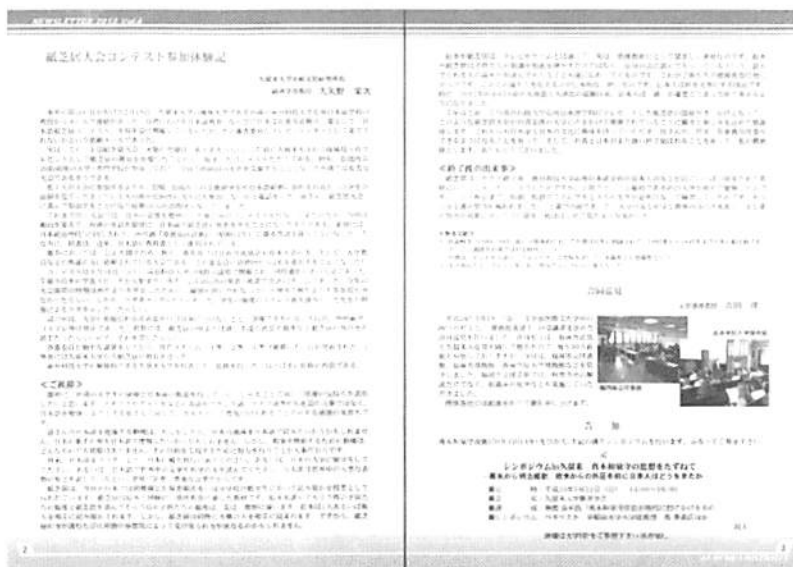
③ニューズレター（vol.4）の発行

地域博物館研究部会ニューズレター CONTECTS

紙芝居大会コンテスト参加体験記	大矢野 栄次
巡見・告知	吉田 洋一
寄稿 九州の図書館・博物館④（九州歴史資料館）	一瀬 智



ニューズレター vol.4（一部）



バス巡見（平成24年度低平地研究会活動報告会資料より転載）

11月16日（金）「城館跡・環濠集落を巡る」と題し、佐賀県神埼市の環濠集落を廻りました。参加者は会員参加者を含め20名。当地には、城跡の伝承を持つ8カ所を含む35カ所の環濠集落が点在しています。今回はそのうちの姉川城跡、横武城跡、直鳥城跡を見学しました。

①姉川城跡…神崎市神埼町南西部、中地江川の左岸に位置し、「館」地名の残る最大規模の島を中心に、大きく三つのブロックに分かれている。姉川城の築城は、肥後が出自の菊池武安が築城したとされており、その後裔が姉川氏と称された。現在はクリークが寸断されているが、江戸時代にはこの水で酒造を行っていたという。

②横武城跡…姉川城から北東に30分ほど歩くと「横武クリーク公園」がある。主要な部分は公園として管理されており、そのほぼ中心部には、クドづくりの家が新築され、「芦辺の館」として解放されている。

③直鳥城跡…直鳥城の初代城主は犬塚家久という。元来筑後三潯郡犬塚郷に城館を築いて犬塚と称し、当地に移ってきたが、元龜年間（1570～72年）頃には城としての機能を失ったと考えられる。現在は「直鳥クリーク公園」として整備・公開されている。

①②は旧神埼町、③は旧千代田町にあります。当日は幸い晴天に恵まれ、充実した見学会となりました。最後になりましたが、神崎市教育委員会の堤 安信・桑原 幸則両氏には、書面をかりて御礼申し上げます。

（文責 吉田 洋一）



『神埼の城館跡と環濠集落』
神崎市 2008年より転載



姉川城跡中央部のクリーク脇にて
（手前中央が神崎市教育委員会 桑原氏）



芦辺の館（神崎市 HP より）

(5) 福祉コミュニティ研究部会

平成24年度は、2つの研究・活動課題に取り組んだ。以下に、その成果と課題について報告する。

研究・活動課題名

- I. 高良山および御井校区における地域交流実践に関する研究活動（継続）
- II. 中津総合ケアセンター「いずみの園」の視察調査

I. 高良山および御井校区における地域交流実践に関する研究活動（継続）

1. 目的

地元ボランティア団体（「高良山歴史観光ボランティアガイドの会」や「高良山の森と環境を守る会」など）と連携、協働するかたちで、子ども・若者からシニアまでの幅広い世代が交流できる機会を設ける。その主旨に沿った多様な活動実践を通して、高良山や御井校区の歴史や文化に触れ、地域に伝わる様々な伝統や文化遺産についての理解を深め、地域交流実践に関する研究活動を行う。

2. 研究委員

濱崎 裕子 久留米大学文学部社会福祉学科 教授（研究委員長）
 大西 良 久留米大学比較文化研究所 講師（研究委員）
 岩坂 浩子 久留米大学文学部情報社会学科 非常勤講師（研究委員）
 ポドリヤク・ナタリヤ 久留米大学大学院比較文化研究所研究員（研究委員）
 大原 朋子 久留米大学大学院比較文化研究科大学院生（研究委員）

3. 研究委員会開催日

平成24年 7 月16日（月）	第 1 回研究委員会	研究計画の検討
平成24年 9 月10日（月）	第 2 回研究委員会	研究スケジュール・手続きの検討
平成24年 9 月24日（月）	第 3 回研究委員会	研究報告①
平成24年10月15日（月）	第 4 回研究委員会	研究報告②
平成24年11月12日（月）	第 5 回研究委員会	研究報告③
平成24年12月10日（月）	第 6 回研究委員会	研究報告④
平成25年 1 月28日（月）	第 7 回研究委員会	研究報告⑤
平成25年 2 月25日（月）	第 8 回研究委員会	研究のまとめ

4. 活動報告

本研究活動によって、地域住民は高良山や御井校区に伝わる地域文化の伝承に関して、強い共感と期待を抱いていることが明らかとなった。また、今後の地域交流実践に関して、地域住民の意見や要望を広くとり入れることにより、地元根差した地域交流と文化創造が可能となり、ひいては地域アイデンティティを深化させたまちづくりにつながっていくことが示唆された。

Ⅱ. 中津総合ケアセンター「いずみの園」の視察調査

1. 目的

近年、住み慣れた地域社会から切り離され、入所施設での集団生活を余儀なくさせる施設サービスについての見直しが盛んに進められている。従来の特別養護老人ホームに代わり、小規模生活単位型と呼ばれる新型特別養護老人ホームが注目されている。今回、大分県中津市にある中津総合ケアセンター「いずみの園」の視察および施設職員へのインタビューを通じて、施設ケアおよび地域ケアにおける高齢者介護の現状とその課題を明らかにすることを目的とした。

2. 研究委員

濱崎 裕子 久留米大学文学部社会福祉学科 教授（研究委員長）
大西 良 久留米大学比較文化研究所 講師（研究委員）
岩坂 浩子 久留米大学文学部情報社会学科 非常勤講師（研究委員）
ポドリヤク・ナタリヤ 久留米大学大学院比較文化研究所研究員（研究委員）
大原 朋子 久留米大学大学院比較文化研究科大学院生（研究委員）

3. 研究委員会開催日

平成24年 6 月25日（月） 第1回研究委員会 研究計画の検討
平成24年 8 月27日（月） 第2回研究委員会 研究スケジュール・手続きの検討
平成24年10月 1 日（月） 第3回研究委員会 事前勉強会
平成24年11月26日（月） 第4回研究委員会 事前勉強会
平成25年 2 月25日（月）～26日（火） 現地視察
平成25年 3 月 4 日（月） 第5回研究委員会 研究のまとめ

4. 活動報告

本研究の結果、小規模生活単位型の導入に伴って、プライバシーの確保は格段に進んだが、その一方で介護職員の負担感の増大や居室者の引きこもりなどの新たな問題も浮上していることも考察された。本研究では新型特別養護老人ホームにおける課題改善に向けた基礎的データを得ることができたが、利用者の立場と施設職員の立場の双方向からの検討がさらに必要であり、今後の研究課題となった。

また、地域ケアに関して「いずみの園」は、厚生労働省の新しい方針に従った訪問看護・介護サービスの提供とフォーマルサービスとインフォーマルサービスを連携する事業にも先駆的に取り組んでおり、今後の展開を継続的に考察していくことも研究課題である。

（文責 濱崎 裕子）

(6) 文化財保存科学研究部会

2012年度活動記録（主要項目のみ。部会員は敬称省略）

- 4 月 1 日 前処理していたクララ種子の播種作業（上宮）
- 9 日 クララ抽出エキスによる大腸菌の抑圧効果の実験開始（大沼）
- 11 日 クララ発芽試験開始（60 ポット 2 箱：上宮）
- 5 月 12 日 グリンシン調査報告会
- 1) グリンシン調査に参加して（上宮、溝田、狩野、大沼）
- 2) 地球のイカット遺産グリンシンを訪ねて（松枝小夜子氏）
- 14 日 松枝哲哉氏の藍生庵にて近藤早苗氏栽培のクララを用いて葉による染色作業
- 6 月 7 日 八女の溝田和紙工房において、クララ靱皮繊維 385g（平 23：215g、平成 24：170g）を原料にしてクララ和紙の漉き作業（上宮・溝田）
- 12 日 2012年度久留米大学公開講座「文化財保存科学と IPM」開始（エルガーラ福岡サテライト）
- 第 1 回 6/12 「文化財保存と IPM—日本の現状について」対談
三輪嘉六九州国立博物館館長（研究部会研究協力者）・狩野啓子
- 第 2 回 6/19 「文化財と虫—防虫クララ和紙の作成」上宮健吉
- 第 3 回 6/28 「文化財 IPM の実践—IPM 支援者の活動から—」内田祥乃（九州国立博物館ボランティア環境部会）・新原茂春（NPO 法人ミュージアム IPM サポートセンター理事長）・下川可容子（株式会社タクト）
- 第 4 回 7/3 「文化財とカビ」大沼雅明
- 第 5 回 7/10 「文化財と IPM —その将来展望」本田光子（九州国立博物館学芸部特任研究員）
- 18 日 農研機構九州沖縄農業研究センター（久留米拠点）を訪問し、調整監の坂田好輝氏と「クララ」を核に据えた共同研究について話合い（狩野、上宮）。
- 21 日 久留米リサーチセンターの井手氏と八女商工会議所の池内氏が久留米大学御井キャンパスを来訪。研究協力協定の見直しについて会談（狩野、上宮）。
- 26 日 九州沖縄農研センターの作物開発・利用研究領域長の須田郁夫氏から共同研究について農研センター側の意向（クララの利活用に該当する研究者がいない）との回答
- 7 月 7 日 中野三敏九州大学名誉教授（研究部会研究協力者）による「今こそ和本リテラシーを！」と題する講演会開催（2012年度日本比較文学会春季九州大会、御井図書館 AV ホールにて）
- 8 月 7 日 研究部会実験室の100号館 A 棟 1 階から C 棟 2 階への引っ越し完了。
- 23 日 知的財産本部においてクララ石鹼の実効機能評価について協議（狩野、大沼、上宮）
- 9 月 12 日 福岡県農政部の企画開発担当の中原氏と八女の県農試の企画担当者の執行氏来学。クララの開発利用について懇談する（狩野、上宮、溝田）。
- 10 月 16 日 県農試八女分場の執行氏と県農政部企画課の中原氏が来学。クララの機能について質疑を受ける（狩野、上宮）
- 25 日 実験室に南オレゴン州立大学の教授が来訪、クララの防虫機能について説明する（狩野、

上宮)

- 30日 「クララハイジの会」の近藤早苗氏(研究協力者)と塚本ちゑ子氏、松枝小夜子氏(研究協力者)と懇談会(狩野、上宮)
- 12月5日 県農政部の企画開発課の中原氏と八女の県農試の企画担当者の執行氏が来室され、会談。
- 11日 八女市役所で八女市のクララ開発研究について、溝田、近藤、塚本、高山(八女市側)、中原、執行(福岡県側)と久留米大学(狩野、上宮)の各氏が会談。
- 12月15日 久留米エールピアで市民講座開催。「クララ和紙と虫害」について狩野(前半)、上宮(後半)を担当し、70名余の聴講者があった。終了後、福岡県農政部の中原氏と県農試八女分場の執行氏と溝田、狩野、上宮で会合。
- 12月20日 大久保博(医学部物理学教室)比較文化研究所の所員に登録。
- 1月28日 ロンドン研修準備会議(大沼、狩野、上宮、松枝、溝田)、通訳として同行予定の矢野も参加。
- 2月18日 八女の溝田和紙工房で溝田俊和氏の紙漉き作業のビデオ撮影を行う(狩野、伊佐、上宮)
- 3月8日 ロンドン・ノリッジ研修旅行(15日まで大沼、狩野、上宮、松枝、溝田、矢野)
自然史博物館、V&A 美術館、山本勉氏(JANEEDS)面会、和紙展(The school of art university college of Norwich)見学、杉山恵助氏面会(大英博物館平山スタジオ)、Mark Nesbitt 博士・Jenny Balfour-Paul 博士面会(Kew Garden)。Mark Nesbitt 博士によるブログ掲載文を参照。
- 19日 筑後文化資料室作業室を400号館から300号館4階に移転。一部は、100号館2階の文化財保存科学研究部会実験室に搬入。

<参考資料>

Washi: the Art of Japanese Paper Mark Nesbitt

Economic Botany blog 01 Mar 2013

Kew's world-class collection of Japanese art papers goes on display for the first time in Britain. Among the many unexpected treasures in Kew's Economic Botany Collection are 111 sheets and 17 objects made from Japanese paper (known in Japan as washi). These were collected between 1869-70 by Sir Harry Parkes, British Minister to Japan, at the request of William Gladstone, British Prime Minister. This was not a frivolous request: the advent of wider literacy had led to serious paper shortages in Europe, hence Kew's interest in papers from other regions.

Collection

Parkes sent the collection to the Victoria & Albert Museum in London. Word reached Kew of its arrival and the director, Sir Joseph Hooker, requested material for Kew. The three-dimensional objects - hats, clothes, boxes, a telescope - were exhibited in Kew's Museum of Economic Botany, but the paper sheets were rolled into glass jars and remained invisible (and protected from light and pollution) for over a century.

The Parkes collection, now divided between Kew and the V&A, was rediscovered by the book designer Hans Schmoller. In the story well told in his handsome book Mr Gladstone's washi

(1984), Schmoller was visiting paper makers' workshops in Japan and was shown a tattered photocopy of Parkes's Report, printed by Parliament to accompany the paper samples. This led him to the portion preserved in the V&A stores, and then to Kew. The rediscovery of such a large and well-preserved collection of historical washi caused much excitement, and led to a major loan exhibition visiting Kyoto and Tokyo in 1994.

Exhibition

It has been my ambition to exhibit the papers in Britain since I first saw them a decade ago. As well as the fascinating story of their collecting, they are artefacts of great and subtle beauty. The karakami, thin paper used on sliding partitions, are decorated with natural pigments such as indigo blue, and materials such as mica. The gikakuji and kinkarakawakami (paper treated to look like leather) are sumptuous, with dark colours, high relief and gilding, and the objects such as hats and slippers are simply unexpected in western culture. All these repay hours of close viewing.

A series of three fortunate events has led to this hoped for exhibition. Firstly, Nancy Casserley, a History of Design MA student at the Royal College of Art, completed a brilliant dissertation on the reception (lukewarm!) accorded to washi in Britain. As part of her project, the papers were photographed and fully catalogued for the first time. Next, the "Washi: The Soul of Japan committee", based in Kyoto, issued a 12 volume set of 800 Japanese papers representing the current state of paper making in Japan (which we have just acquired for the Kew Library). This comes at a timely moment when hand paper making is both highly valued in Japan, but under threat from modernisation. The third happy event was that a good friend, at the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures in Norwich, became aware of both collections, and saw how 19th and 21st century washi side-by-side could make a fascinating exhibition. Through support from the Sainsbury Institute, Norwich University of the Arts (NUA) and many Japanese colleagues and institutions, the exhibition Washi: the Art of Japanese Paper has come to be, and will run at The Gallery at NUA from 12 March - 20 April 2013.

Recent paper from the "Washi: Soul of Japan" collection

What's on in Norwich

Exhibiting coloured papers presents some challenges, particularly as they are very sensitive to light. Over 100 pieces of washi are on show, and this exhibition is unlikely to be repeated elsewhere. I would warmly urge readers to make the journey to Norwich. There is a lot to see, as the International Association of Hand Papermakers and Paper Artists (IAPMA) has also organised three exhibitions of paper art, inspired by washi, held in nearby galleries at the same time, the "Art and Soul of Paper". There is also an extensive programme of talks and workshops on washi old and new, including an all-day conference and private view of the exhibitions on Saturday 16 March. Nancy Casserley is curator of the exhibition and author of the associated book to be published by Kew, Washi: the Art of Japanese Paper, which will be launched in London on 19 March - a highly satisfactory outcome from a MA dissertation!

(文責 狩野 啓子)

(7) 民事法研究部会

民事法研究部門（民事法研究会）の今年度の活動実績は以下のとおりである。

日 時：2012年 9 月14日

報告者：荒津史佳氏（西南学院大学研究生）

テーマ：代理懐胎一向井亜紀の事例を中心に―

（最決平成19年 3 月23日民集 61巻 2 号 619頁）

（文責 石川 真人）

(8) 地域社会・文化・経済研究部会

平成24年度の地域社会経済研究専門部会の活動報告として、1. 久留米大学学外公開講座（御井キャンパスと福岡サテライトとコンソーシアムくるめりあ）を主催した。

1. 公開講座

《日本の鉄道近現代史》

久留米大学公開講座「日本の鉄道近現代史」と題して、5月21日から6月18日までは、御井キャンパス 500号館 51A教室において、石井幸孝 NPO 鴻臚館・福岡城跡歴史・観光・市民の会理事長（元 JR 九州会長）を招いて、大矢野栄次（久留米大学教授）とともに、下記の要領で開催した。

演 題	講演者氏名	所 属	開講日	会 場
戦前の鉄道と社会	石井 幸孝	NPO 鴻臚館・ 福岡城歴史・ 観光・市民の会 元 JR 九州社長・ 会長	5 月23日(水)	御井キャンパス 500号館 51A教室 18：30-20：00
戦後の鉄道と社会			5 月30日(水)	
鉄道の現在と未来			6 月 6 日(水)	
鉄道物流と経済	大矢野栄次	経済学部教授	6 月13日(水)	

《古代史講座 2014》

久留米大学御井学舎 500号館 51A教室において、平成24年 9 月 1 日から 9 月22日までの毎週土曜日 14：00－15：30 に、古田武彦先生の門下の先生方を招聘して、大矢野栄次（久留米大学教授）とともに、久留米大学公開講座「古代史講座 2014」を開催した。

演 題	講演者氏名	所 属	開講日	会 場
久留米は日本の首都だったー九州王朝史概論	古賀 達也	古田史学の会	9 月 1 日(土)	御井キャンパス 500号館 51A教室 14:00-15:30
元岡遺跡の象嵌刀にみる百済文化	奥野 正男	筑紫古代文化研究会 会長	9 月 8 日(土)	
九州王朝論の新しい展開	正木 裕	千里ライフサイエンス振興財団	9 月 15 日(土)	
九州王朝論と平城京	大矢野 栄次	経済学部教授	9 月 22 日(土)	

《高速度物流システムの未来を考える》

また、久留米大学公開講座「高速度物流システムの未来を考える」と題して、平成24年11月10日から12月1日までの毎週土曜日 14:00-15:30 に、福岡サテライト会場において石井幸孝 NPO 鴻臚館・福岡城跡歴史・観光・市民の会理事長（元 JR 九州会長）と大矢野栄次（久留米大学教授）で開催した。

演 題	講演者氏名	所 属	開講日	会 場
大都市間輸送機関としての高速度物流システム	石井 幸孝	NPO 鴻臚館・福岡城歴史・観光・市民の会 元 JR 九州社長・会長	11月10日(土)	福岡サテライト 14:00-15:30
地域開発と高速度物流システム			11月17日(土)	
高速度物流システムの未来			11月24日(土)	
新幹線貨物輸送と世界経済	大矢野 栄次	経済学部教授	12月1日(土)	

2. 新幹線物流研究会

本研究会からスタートした「新幹線物流の研究会」の研究成果が、環境省・国土交通省・総務省等主催の「eco japan cup 2011」において、「新幹線列島大動脈の夜間物流への活用」（石井幸孝氏（元 JR 九州社長・会長）・大矢野栄次教授（久留米大学））が、優秀政策提言証を受賞した。

この「新幹線物流」の研究を基に、佐賀県と長崎県において、「肥前の殖産を考える会」が本年度春に発足して、物流新幹線構想についての勉強会と広報活動を始めている。

今後、久留米地域のみならず、東京都・福岡県と佐賀県、大阪府、宮城県、青森県等で研究会として拡大・進展していく予定である。研究会の今後の政策実現が期待されている。

（文責 大矢野 栄次）

(9) 地域精神保健福祉研究部会

【論文・研究ノート等】

辻丸秀策『慢性覚せい剤中毒と妄想型統合失調症の類似性と異種性に関する臨床精神医学的研究』
比較文化年報第22輯 久留米大学比較文化研究科 2013年 3 月

青木正恵『医療ソーシャルワーカーによる退院援助に関する一考察』九州社会福祉学第9号 日本社会福祉学会九州地域部会 2013年 3 月

青木正恵『在宅退院における医療ソーシャルワーカーの役割』久留米大学大学院比較文化研究論集第31号 久留米大学比較文化研究科 2013年 3 月

大西良ほか『キャンパスを開放したイベント型まちづくりの実践的研究～“ゆにばひろば”参加者のコミュニティ意識に関する調査結果を中心に』比較文化研究第47輯 久留米大学比較文化研究所 2013年 3 月

【学会発表】

青木正恵『医療機関における社会福祉援助技術現場実習の役割について～一人の実習生の実習日誌から学んだ実習生が求める180時間～』日本社会福祉学会九州部会第53回研究会 福岡県久留米市 2012年 6 月

末永和也『シニアネット A における健康・生きがい・まちづくり実践に関する研究』日本地域福祉学会 第26回全国大会 熊本県熊本市 2012年 6 月

大西良・保坂恵美子『イベント型地域交流による大学と地域のネットワークづくりに関する研究～久留米大学（ゆにばひろば）に参加した学生および地域住民への調査を中心に～』日本地域福祉学会 第26回全国大会 熊本県熊本市 2012年 6 月

藤島法仁ほか『地域で支える介護予防事業の取り組みと課題～地域住民参加型の介護予防イベント実践を例に～』日本地域福祉学会 第26回全国大会 熊本県熊本市 2012年 6 月

大西良『学校システムを活かした不登校支援の在り方について』第11回日本精神保健福祉士学会学術集会 熊本県熊本市 2012年 6 月

大西良ほか『システム・マップを用いた多職種連携の機能分析～学校現場における不登校支援事例の検討から～』日本福祉心理学会第10回大会 東京都 2012年 8 月

占部尊士ほか『地域リハビリテーション事業に関する医療系学生の意識調査～介護予防イベント実践への参加を通して～』日本福祉心理学会第10回大会 東京都 2012年 8 月

(文責 辻丸 秀策)

(10) 心理教育研究部会

1. 久留米国際セミナー 2012

International Seminar on Well-being and Health in Kurume

開催主旨および参加者

「ウェルビーイングと健康」に関する最近の研究の進展と実践活動をはじめとする健康科学領域における報告と議論を行うことを目的として開催した。米国など国内外から12名の発表者を招き、午前の部は英語セッション、午後は日本語でのセッションで合計11演題 3セッションを行った。また、ヘルスリサーチを志す若手の研究者には広く発表の場を会場内に提供するために英語でのポスター発表(12タイトル)を行った。大学生および一般の方々など計79名、合計91名が参加し、活発な議論や学術交流が行われた。

日 時：2012年11月24日(土) 午前10時から午後 5 時10分

場 所：久留米大学 御井学生会館 3 階

主 催：久留米大学大学院心理学研究科津田彰研究室(健康心理学)

共 催：一般社団法人日本健康心理学会国際委員会、久留米大学大学院心理学研究科

久留米大学比較文化研究所心理教育部会、Asian Association of Indigenous and Cultural Psychology

後 援：久留米大学文学部同窓会

協 賛：アイ・アイ・ティーセンター、株式会社 TTC、クノール食品株式会社、花王(株)

ヒューマンヘルスケア研究センター

プログラム

第1セッション(英語) 「Evidence-based Clinical Psychology for Research and Practice」

Convener & Chair Akira Tsuda (Department of Psychology, Kurume University)

Presenter

Yoshiyuki Tanaka (Department of Psychology, Kyoto Tachibana University)

「A Contribution of Perceived Well-being toward the Outcomes of TTM based Stress-Management Practice」

Michiyo Ando (St. Mary's College, Faculty of Nursing)

「Adaptation of the Trastheoretical Model to Bereavement Life Review Therapy for bereaved families」

Noboru Iwata (Department of Clinical Psychology, Hiroshima International University)

「Culture and Positive Emotion - a hurdle toward positive psychology in Japan」

Jorge Wong (Palo Alto University, USA)

「Center for Addiction Recovery and Empowerment (CARE): A culturally responsive approach to problem gambling」

特別講演 「100歳時代を生き抜く力」

異地三郎（健康長寿マイスター、ギネス世界記録認定、しいのみ学園創設者）

第 2 セッション 「東日本大震災被災者への支援：これまでとこれから」

セッション座長 安藤 満代（聖マリア学院大学）

発表者

堀毛 裕子（東北学院大学教養学部・宮城県臨床心理士会・前会長）

「現地の視点から心理支援を考える」

金原さと子（Asian American for Community Involvement）

「Psycho/Social Interventions as the First Responders & Tomodachi Softbank Leadership Program Summer 2012」

堀毛 一也（東洋大学社会学部）

「Subjective well-being の多面性と震災前後の変化」

第 3 セッション 「ウェルビーイングと健康のためのトータルケア」

セッション座長 岡村 尚昌（久留米大学高次脳疾患研究所）

発表者

矢田 幸博（筑波大学大学院グローバル教育院、久留米大学大学院客員教授）

「完全天然香料の生理効果と美容健康分野への利用」

御堂 直樹（クノール食品株式会社 開発工業化センター）

「スープ摂取により得られる感覚と健康の関係」

山本 哲郎（㈱ TTC 代表取締役社長、久留米大学大学院客員教授）

「ストレス・睡眠関連質問紙を用いた機能性食品の評価」

（文責 津田 彰）

2. 大野裕先生による認知行動療法ワークショップ**【目的】**

久留米大学修了生への卒後教育を本研修の第一目的とする。また、久留米大学修了生のみならず福岡県内の臨床心理士を対象としたスキルアップ研修を試みることによる、地域貢献を第二の目的とする。

【内容】

講 師：大野 裕（独）国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センターセンター長

日 時：平成24年 9 月 2 日（日曜日）

場 所：当大学の学生会館 ミーティングルーム 3

時 間：9：30～12:00（第 1 部）、13：00～14：30（第 2 部）

料 金：無料

参加者：修了生を中心とした、臨床心理士、大学院生、計 71名（院生 25名 学部卒業 4 名 院修

了生 15名 久留米大学以外 17名 不明 2名 参加者 63名 学生スタッフ 6名 その他スタッフ 2名)

研修内容：第 1 部 認知療法、認知行動療法の講義と、第 2 部 心のスキルアップトレーニングのワークを行った。

第 1 部 認知療法、認知行動療法の講義

動画等を見ながら、認知療法、認知行動療法の基礎やソクラテス式問答等について講義。

第 2 部 心のスキルアップトレーニングのワーク

自動思考記録表を用いて、各人記入しその後グループでの振り返り。

【結果】

質問紙の結果

- ・ 認知行動療法の理解に関しては「よかった」が 37 名、「まあまあよかった」が 6 名であった。(Fig. 1)
- ・ 研修全体への感想に関しては「よかった」が 37 名、「まあまあよかった」が 6 名であった。(Fig. 2)
- ・ 本研修が役に立ちそうかという質問に関しては「そう思う」が 37 名、「まあまあそう思う」が 6 名であった。(Fig. 3)

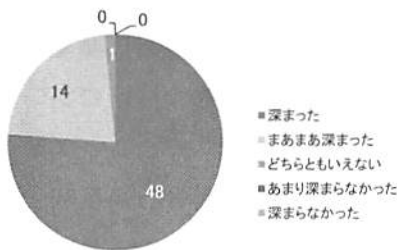


Fig. 1 認知行動療法の理解について

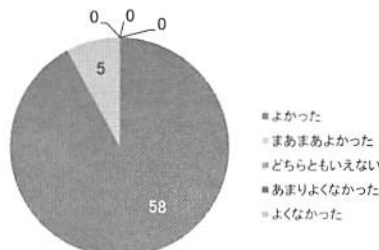


Fig. 2 研修全体についての感想

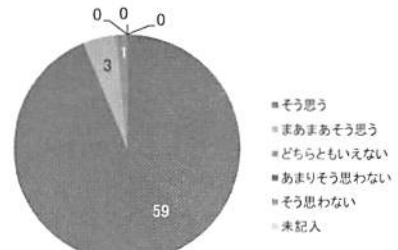


Fig. 3 本研修はためになりそうか

〔自由記述の結果〕

本研修について「本研修のどのようなところが役に立ちそうか」を自由記述で回答を求めたところ「認知療法、認知行動療法の理論から実践についての具体的なところまでを丁寧に話して下さったので、理解が深まりました。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。実習があったので、理解がしやすかったと思います。」「自動思考記録表を書くことで、頭の中がかなりスッキリしました。これからの生活の中で使ってみたいと思います。貴重なお話をありがとうございました。」「非常に分かりやすい内容でした。来年は、今日の後半部分を詳しくお話してほしい。」「無料で、こんな研修が受講できて幸せです。ありがとうございました。」「特に認知行動療法という「パッケージ」という最初に「技法ありき」として臨床をやっている人がいて、治るため、治せる療法なので、残念な思いでした。本人のワークショップを聞いて、もっと上手にやれるように努力を続けたいと思いました。」「ワークの時間をもっととってほしかった。短い時間だったので、あいまいな部分を明確にしたかった。」「非機能思考発見シートや自動思考記録表など、実際に自分でやってみてむずかしさが分かってよかった。(クライアントが行うとき、「こういうところでつまずきそ

う」というのがわかった)」「時間が短すぎた。コラム表の記入の仕方など、ちゃんと書けているのか、参加者同士の確認では不安が残った。」という感想も見られた。

【まとめ】

本研修においては、参加者をみると院生以外では久留米大関係者の参加が最も多かった。その為、卒後教育を行うことは出来たと考えうる。また、久留米大学関係以外の参加者も多数いたことや、研修の日時、内容、参加者の負担の少なさについて評価する意見が見られたことから、地域貢献の一助となったのではないだろうか。しかし、一方で研修の時間配分については、一考する必要があることが示唆された。全体としては、今後ともこのような形の研修を望む声も多かった事を考えても、本研修は研修の趣旨、内容が目的にかなったものであると考えられる。

【今後の課題】

今後どのような研修を希望するかという質問に対して、「行動療法」「ボーダーラインに対する BDT についてもっと学びたいです」「認知療法シリーズで企画してもらいたい」「実践に役立つようなワーク式の研修会が続いてほしい」「『そんな事話しても、現実是不変変わらない』というような反応をされる CI の方に、認知行動療法を行う方法を紹介してほしいです。」「動機づけ面接を学びたいです。」「認知行動療法」など、学派、領域、内容についても多岐に渡っていた。よって今後、研修を行う際には内容について検討していく必要があると考えられる。また、参加希望人数が非常に多く、久留米大学関係者も多く断らざるを得なかった。その為、引き続き認知行動療法の研修会開催についても検討する必要があると思われる。

(文責 山本 眞利子)

(II) 会計専門職研究部会

①研究テーマ

会計専門職研究部会は、会計専門職（公認会計士・税理士）の実態と制度に関する研究を目的としている。

②研究計画

公認会計士（監査法人）および税理士（税理士法人）の業務実態の調査研究

会計専門職（公認会計士・税理士）の実態と制度に関する研究

③2012年度の活動報告

a. 会計専門職機関への調査研究（出張）等

1. 調査研究対象：日本公認会計士協会北部九州会（事務局・天神幸ビル）

日 時：2012年 9 月28日(金)

調査内容：日本公認会計士協会北部九州会の活動状況

公認会計士業務の現状（実態）

公認会計士制度の改正動向

公認会計士制度説明会の実施状況

協会対応：副 会 長 長 伸幸 氏

幹 事 首藤 恒之 氏（渉外広報委員会委員長）

事務局長 角田 吉則 氏

2. 調査研究対象：中央大学 専門職大学院（アカウンティング・スクール）

日 時：2013年 2 月25日（月）（東京都新宿区市谷田町）

調査内容：会計専門職大学院（アカウンティング・スクール）の現状、今後の動向

3. 調査研究対象：金融庁内 公認会計士・監査審査会

日 時：2013年 3 月12日（火）（東京都千代田区霞が関）

調査内容：公認会計士・監査審査会の活動状況

金融庁18階応接室において、事務局より「公認会計士・監査審査会の活動状況」と題した冊子（184頁）を受取り詳細に説明を受ける。

事務局対応：総括調査官 須田 正徳 氏

総務第一係長 山本 哲也 氏

4. 調査研究対象：日本税理士会連合会（東京都品川区大崎）

調査内容：日本税理士会連合会の活動状況

日本税理士会館 8 階応接室において、事務局より「日本税理士会連合会」と題した冊子、「2012 税務教育」と題した冊子（167頁）、および「日本税務研究センター案内」の資料を受取り詳細に説明を受ける。

また、日本税理士会連合会・租税教育推進部編「DVD 2012 税務教育 講義用テキスト」の提供を受けた。

事務局対応：広報課・課長 篠崎 正俊 氏

b. 講演会の企画・実施

1. 日本公認会計士協会北部九州会による講演会「制度説明会」の実施

日 時：2012年12月11日（火） 13：10 から 14：40、724教室（久留米大学御井学舎）

内 容：制度説明会、合格体験談、質疑応答、パンフレット配付、等

協会講演者：日本公認会計士協会 北部九州会

副会長 長 伸幸 氏

渉外広報委員長 首藤 恒之 氏

渉外広報副委員長 浦川 晃司 氏

事務局 田中 智弘 氏

準会員 岸田 奈緒美 氏（2010年合格者）

準会員 木原 明彦 氏（2011年合格者）

c. 研究会の企画・実施

1. 会計専門職業人（税理士・会計士）による研究発表会

日 時：2013年 3 月23日（土）、24日（日）

開催場所：サンピア福岡、会議室（福岡県福津市西福岡）

研究報告者：中村 悦郎 氏（山本雅男税理士事務所・所長代理）

取得原価主義と時価主義について

久保田 浩一 氏（中尾寿子税理士事務所・副所長）

減損会計について

江口 弘高 氏（㈱オーエンオー 経理次長）

のれん会計について

富田 政幸 氏（T・O・T 総合保険事務所所長）

税効果会計について

木村 茂 氏（川辺公認会計士事務所）

企業価値評価について

税田 大輔 氏（税理士法人プロネット）

取得原価主義会計と減損について

d. その他

1. 日本公認会計士協会北部九州会の主催による「新春のつどい」に来賓として出席

日 時：2013年 1 月11日（金）（ホテルニューオータニ博多）

関係団体や関係機関の出席者と意見交換

会 長	篠原 俊 氏	常任幹事	大津 雅司 氏
副会長	森 行一 氏	常任幹事	堺 昌義 氏
副会長	長 伸幸 氏	幹 事	金子 一昭 氏
副会長	千々松 英樹 氏	幹 事	中野 宏治 氏
副会長	青野 弘 氏		

（文責 杉野 博貴）

日本公認会計士協会 北部九州会 トップページ > 公認会計士を志す方へ

公認会計士を志す方へ

CPAという言葉を聞いたことはありますか？
（Certified Public Accountants）＝ 公認会計士

CPAは会計のスペシャリストとして、社会の健全な発展に重要な役割を担う仕事です。
 また、著しく変化する現代社会にあって、その高い専門的能力へのニーズはますます拡大。
 監査・税務・コンサルティングの基本業務のみならず、CPAを選ぶことは、いま注目される領域がそのまま活躍の場になることを意味します。フィールドはまさに自分次第。
 バックボーンではなく、自分のスキル、自分の経験、自分の先を読む力がそのまま価値になる。CPAを選ぶということーそれは、先の先に関わりなく広がる可能性と夢を手に入れることです。

制度説明会

公認会計士制度や業務内容について、一人でも多くの学生の方に興味や関心を持って頂くと共に、将来公認会計士を目指す方々に、より一層の知識と理解を深めていただくことを目的として開催しています。

平成24年度開催実績

開催日	時間	高校・大学名	参加人数
平成24年6月21日	14:30～16:00	長崎大学	31名
平成24年6月22日	10:40～11:40	西南学院大学	122名
平成24年6月22日	14:40～16:10	住友大学	60名
平成24年6月25日	14:50～16:20	九州大学	67名
平成24年6月26日	13:00～14:30	福岡大学	197名
平成24年11月16日	10:40～12:10	福岡大学	94名
平成24年12月11日	13:10～14:40	久留米大学	135名

◀ 参考資料

（協会HPに久留米大学での制度説明会開催が紹介されている）

2. 筑後川流域圏の総合研究（うきは・朝倉地域）

1) 「筑後川流域圏の総合研究」

「筑後川流域圏の総合研究」は2006年度から開始した。最初（2006年度・2007年度）の研究対象地域は「大川」地域とし、2008年度・2009年度は「三潨（旧三潨郡である大木町、旧三潨町、旧城島町）」地域の研究を行った。さらに2010年度と2011年度においては「久留米市」を対象に研究を行った。そして2012年度からは「うきは・朝倉」地域の研究を行っている（2012～2013年度の予定）。

なお、これまでの地域研究の成果報告書として『大川地域研究』、『三潨地域研究』、『久留米地域研究』を刊行している。

2) 「うきは・朝倉地域研究」

2012年度のプロジェクトメンバーと研究テーマ

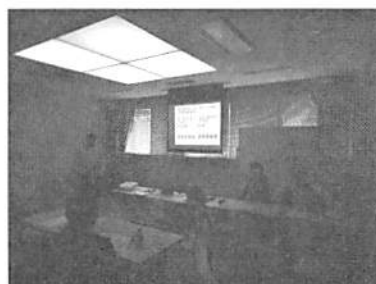
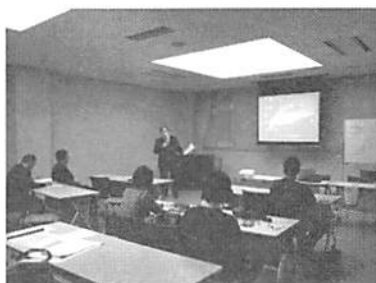
浅見良露	浮羽・朝倉地域における農業的土地利用
堂前亮平	うきは・朝倉地域における町並み保存
河内俊英	河川および周辺環境と水環境について
宮原信孝	筑後川中流域の地域コミュニティ動向
畠中昌教	酒造業と観光
駄田井正	うきは・朝倉地域の文化観光資源
吉田洋一	うきは・朝倉地域の古文書探求
葉山アツコ	久留米市田主丸財産区に関する研究
市川鄧康	筑後川と漱石
大矢野栄次	うきは、朝倉地域の古代と経済状態
大西 良	うきは・朝倉地域における子育て支援に関する研究
谷口 豊	うきは・朝倉地域の農業
狩野啓子	① 楠森河北家住宅（国指定登録有形文化財）の文化財保存の取り組み ② 在来種のお茶栽培の取り組み

（文責 浅見 良露）

3. 比較文化研究所 研究員 発表会

1) はじめに

2006年度よりスタートした当発表会は、本年度で第7回目の実施となりました。本年度は21名の研究員が当研究所に所属しており、当発表会ではその内の13名が発表を行いました。研究員諸氏は、久留米大学大学院（比較文化研究科 後期博士課程）を終え、仕事をされながら研究員として活動している方が多いことから、どうしても当日の発表を行うことができない方が出てきます。しかし、そのような事情の方も本年度に実施した研究成果を予稿集に掲載することで報告しています。予稿集は、比較文化研究所の会議室に残部をおいていますので、ご興味のある方は、ぜひ手に取っていただければと思います。本年度は学生会館3階のミーティングルーム2で開催しました。平成25年2月18日（月）という平日にもかかわらず、担当教員の先生方をはじめ、各領域の院生といった多くの方々に参加していただきました。また、各会場での質疑応答も活発に行われ、内容のある発表会となりました。



2) 発表会の日時、会場、タイムスケジュール及び発表形態

① 日 時：平成25年2月18日（月） 9：30～15：00

② 会 場：久留米大学（学生会館3階 ミーティングルーム2）

③ タイムスケジュール

- | | |
|-----------------|---------|
| (1) 9：30～9：50 | 受 付 |
| (2) 9：50～10：00 | 開会挨拶 |
| (3) 10：00～12：10 | 研究発表6演題 |
| (4) 12：10～12：40 | 昼 食 |
| (5) 12：40～14：50 | 研究発表6演題 |
| (6) 14：50～15：00 | 閉会挨拶 |

④ 発表形態

1人20分（口頭発表15分 質疑5分）

2～3演題毎に座長を交代する（1座長：1時間程度で時間調整）

演者の他に、座長、時間係、ベル係を置く（座長、時間係、ベル係は、研究員で行う）

3) 発表演題一覧

グループ① 10:00～11:00

座長：赤須 大典

時間・ベル：東 巧

時 間	発 表 演 題	発 表 者
10:00～10:20	中学生の障害および障害児・者への受容行動変容プログラムの開発と効果の検討	ポドリヤク・ナタリヤ
10:20～10:40	恋人への分離不安と愛情が恋人支配行動に及ぼす影響	片岡 祥
10:40～11:00	在宅一人暮らし高齢者を取り巻く互助、共助と生活の質の関連について	藤島 法仁

グループ② 11:10～12:10

座長：片岡 祥

時間・ベル：ポドリヤク・ナタリヤ

時 間	発 表 演 題	発 表 者
11:10～11:30	アンケート調査における適当な回答とランダムを比較する	東 巧
11:30～11:50	所属集団における自己認知と集団同一視	赤須 大典
11:50～12:10	近代期の筑後地域における交通インフラ整備の影響	篠倉 大樹 高木 恵

グループ③ 12:40～13:40

座長：羽山 順子

時間・ベル：陳 宥蓉

時 間	発 表 演 題	発 表 者
12:40～13:00	久留米方言「むぞか」について	橋口 公子
13:00～13:20	筑後川流域における連携とリバーツーリズム	夏 広軍
13:20～13:40	中国人観光客の来日消費実態	王 彦風

グループ④ 13:50～14:50

座長：橋口 公子

時間・ベル：夏 広軍

時 間	発 表 演 題	発 表 者
13:50～14:10	中学生の食習慣と自覚的心身健康	羽山 順子
14:10～14:30	発達障害児のロールシャッハ・テスト上の特徴	天満 翔
14:30～14:50	東アジア中心とした廃棄物・リサイクルの現状に関する考察	陳 宥蓉

(文責 大西 良)

4. 日誌 (2012年度)

2012年 (平成24年)

4 月18日 (水) 比較文化研究所運営会議

4 月25日 (水) 比較文化研究所会議

6 月 (持ち回り) 比較文化研究所協議会

7 月14日 (土) 第 6 回ゆにばひろば 多世代がつながる音楽ステージ「みいステ」

7 月17日 (火) 比較文化研究所運営会議

7 月18日 (水) 比較文化研究所会議

9 月26日 (水) 比較文化研究所運営会議

10月 3 日 (水) 比較文化研究所会議

10月 (持ち回り) 比較文化研究所協議会

11月29日 (木) 比較文化研究所運営会議

12月 6 日 (木) 比較文化研究所会議

2013年 (平成25年)

1 月 8 日 (火) 比較文化研究所運営会議

1 月 9 日 (水) 比較文化研究所会議

1 月10日 (木) 比較文化研究所協議会

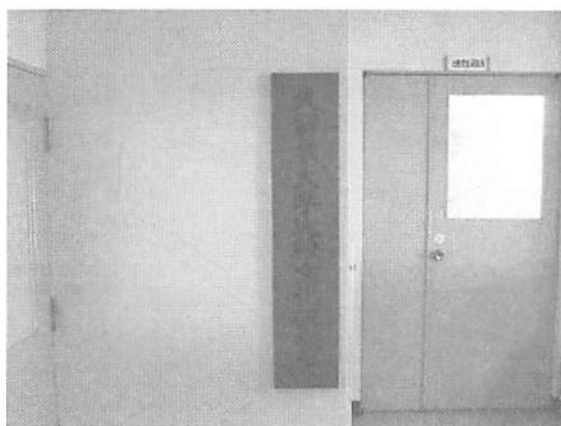
3 月13日 (水) 比較文化研究所運営会議

※部会活動を除く

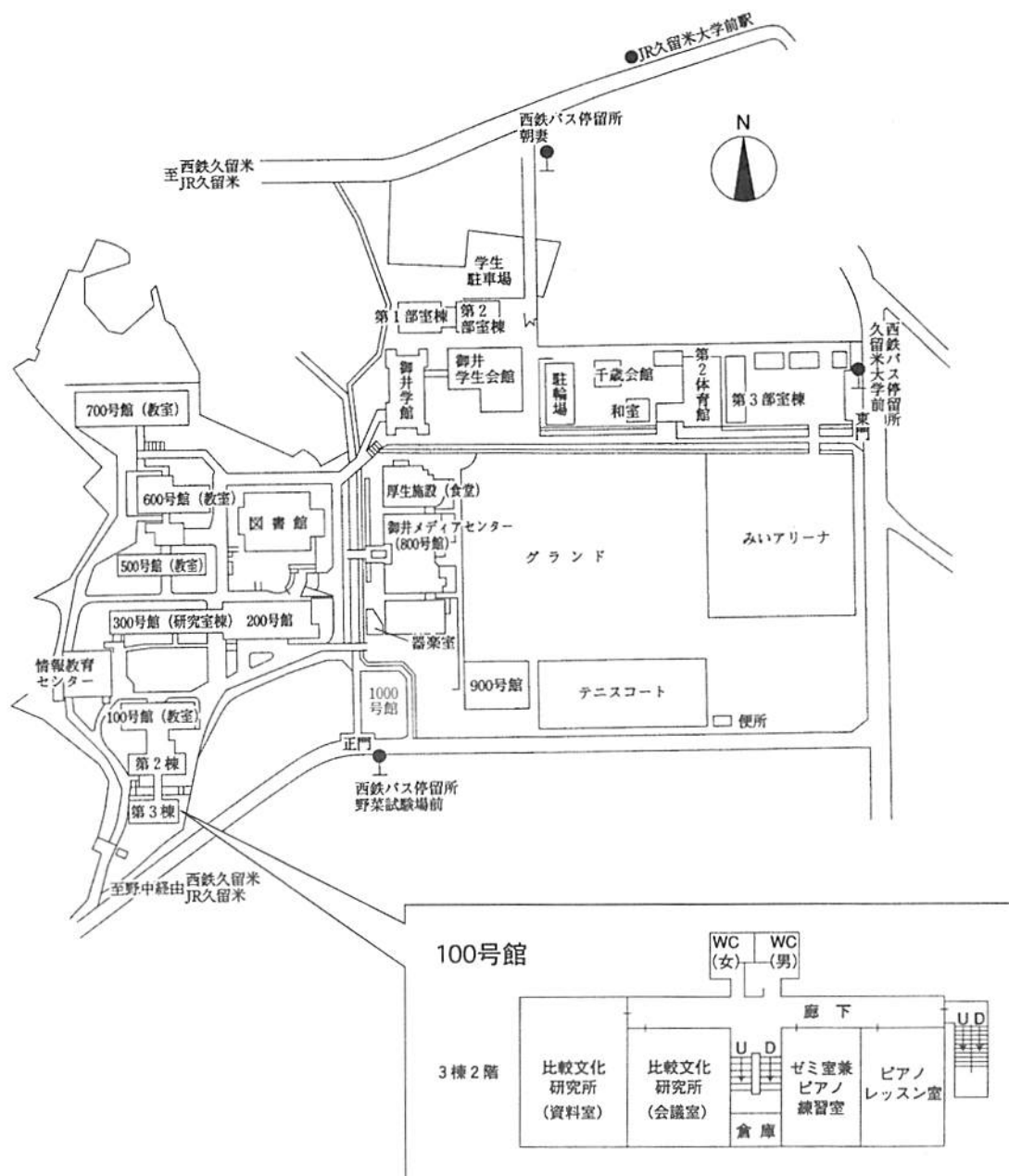
施設・設備

比較文化研究所は、1987年の設立当初は、旭町キャンパスの大学本館 3 階に設置されましたが、大学院比較文化研究科が開設された1989年に、旭町キャンパスから御井キャンパスに移りました。その後数回の移動を経た後、2006年に100号館の現在の位置に移動しています。研究所の部屋は 2 部屋あり、1 部屋は会議・研究会に使用、他の 1 部屋は資料室および作業室として使用しています。なお、専任所員の研究室は、300号館にあります。

研究所の資料室には、紀元前 3 世紀に不老不死の薬を求めて渡来したとされる「徐福」に関する膨大な図書が保管されています。これは、元サガテレビ副社長内藤大典氏（故人）が収集された図書です。現在、図書の整理を進めているところであり、この方面の研究の発展に寄与するものと期待されます。



久留米大学（御井学舎）比較文化研究所 案内図



久留米大学 比較文化研究所年報 第6号

著作権所有

不 許 複 製
禁 転 載

平成25年11月29日 印 刷 第6号
平成25年11月29日 発 行

編集兼 久留米大学比較文化研究所
発行者 〒839-8502 久留米市御井町1635

印刷所 もろふじ印刷
〒830-0074 久留米市大善寺町夜明1116